

## 中世大宰府の天台寺院

中世の大宰府は活発な宗教活動が展開されており、宗教都市の様相を見せていました。特に大きな勢力を持っていたのが、安楽寺（太宰府天満宮）・有智山・原山などの天台系の寺院です。このうち、有智山は内山寺・大山寺とも呼ばれ、宝満山に所在していました。また、原山には無量寿院という寺があり、四王寺山東麓に所在していました。これらは当時非常に栄えた寺院でしたが、いつも協力関係というわけではなかったようです。

建保4（1216）年、原山の悪僧15人が大宰府の役人刃傷の罪により流刑に処されます。安楽寺別当定円がこの訴えを起こしており、原山と安楽寺との衝突が事件の背景にあつたと考えられています。

また、正安2（1300）年、筑前国御家人中村弥二郎は7月20日から30日まで安楽寺に宿直しています。これは有智山と原山の闘争によるものであることが史料から分かります。

元亨4（1324）年8月、東大寺は末寺観世音寺の仏神事を原山・有智山の僧侶に勤行させるよう、朝廷に訴



えています。これは治暦2（1066）年に原山・有智山の僧侶各21人が観世音寺の仏神事を勤行したことを論拠としています。原山はその後このことに反発し、建仁年間（1201～03）、寛元年間（1243～47）には有智山だけがこの仏神事を勤行したと記しています。また、元亨3（1323）年にも、原山が観世音寺の仏神事の勤行につき、道理のない訴えを起こしたと非難しています。

元亨4年の訴えでは、観世音寺が原山の非道を太宰府や守護少弐氏などの現地勢力に申し入れても、それらの勢力が原山の僧侶との関わりが深いことにより原山の偽りの訴えを許してしまうので、朝廷から鎌倉幕府に命令を下してほしいとしています。由緒ある観世音寺の訴えが認められないほど、原山が現地の勢力に浸透し力を持っていたことがうかがえ、興味深いです。

このように中世大宰府に展開した天台寺院は、数が多いものの、必ずしも一枚岩というわけではなく、複雑な対立関係をみせるのです。

太宰府市公文書館 朱雀 信城